

〈書 評〉

Robert A. Karl, 2017
“**Forgotten peace: Reform, violence,
and the making of contemporary Colombia.**”
University of California press

内山 翔馬

UCHIYAMA Shoma

Robert A. Karl はミネルバ大学教授、Ph.D. デートマス大学学士および博士号を取得。プリンストン大学などを経て現職。近代ラテンアメリカおよびカリブを地域研究としており、政治と思想の社会史を専門としている。

半世紀以上にわたり、コロンビアは政治的紛争や民衆暴動なども含め、多様な主体と動機による暴力を経験してきた。コロンビアでは、保守党と自由党という二大政党が政治の実権を握る「寡頭支配体制」が存在していた。1948年にこの体制と対立する自由党の反主流派であったガイタン（Jorge Eliecer Gaitan）大統領選挙候補が保守党員に暗殺された事により、Gaitan 支持者が起こした国内規模の暴動—「ボゴタ暴動（ボゴタソ）」が発生した。その後、1958年に「国民戦線」という二大政党が交代で政権を握る二大政党体制の強化と「ボゴタ暴動」のイメージ払拭を目的とした政治体制が構築されるまでこの暴動は継続された。この期間をコロンビア内戦研究では「ラ・ビオレンシア」と呼んでいる。

本著では、「ラ・ビオレンシア」の起源と実際に何が起こったのかについて研究がなされ、のちに寡頭支配体制と対決するコロンビア革命軍（Fuerzas

Armadas Revolucionarias de Colombia: FARC) の設立背景に注目している。主要な研究対象は「学識派 (letrados: men of letter)」という知識人である。「学識派」の研究は「ラ・ビオレンシア」が何を求め、何故暴力の行使が行われたのか、どのように暴力が行使されたのかということであった。彼らの業績はコロンビアの暴力の源流とそれに対応するための暴力の抑制のために学術利用があったことを示すものである。

本評では暴力の行使に対する研究とその研究者がどのように平和のための学術利用をしていったのかを中心に論じたい。

本著の構成は以下のとおりである。

Introduction: peace and violence in Colombian history

1. Messenger of New Colombia
2. Encounter with Violence, 1957-1958
3. The Making of the Creole Peace, 1958-1960
4. Peace and Violence, 1959-1960
5. Reformist Paths, 1960-1964
6. Books and Bandit, 1962-1964
7. Confrontation, 1963-1966

Epilogue: The making of “La Violencia”

本著の「ボゴタ暴動」に関する研究はアルベルト (Alberto Lleras Camargo) とグズマン (German Guzman Campos) という二人の主要なコロンビア内戦研究者に焦点を当て、分析されている。

1章では「ラ・ビオレンシア」のきっかけと呼ばれる「ボゴタ暴動」前後のコロンビア内政について述べられている¹。

従来の日本国内の研究では、「ボゴタ暴動」は自由党と保守党の寡頭支配体制に対立したガイタンとその報復としてのガイタン暗殺によって発生した

とされている。

コロンビアは独立後も、植民地時代の地方分立的伝統が根強く残っていったとする（伊高 2003:42）²。統一国家として成立させるために連邦制と中央集権制のどちらを選択するかという政治方針によって政治権力対立が存在した。のちに連邦制支持の自由党と中央集権主義の保守党による対立構造の形成と二大政党による寡頭支配体制を生み出した。自由党内部には主流派と反主流派によって形成時点で自由党内部に対立が生まれていた（伊高 2003:42）³。保守党の権力掌握によって対抗勢力としての反主流派からガイタンが登場する。大衆の支持を受けたガイタンの政治権力獲得が既存権力体制にとっての脅威になったことからガイタンが暗殺された。

本章ではアルベルト（のちのコロンビア国立大学社会学設立に影響を与える）を中心に「ボゴタ暴動」前夜の政治的対立を描き出している。アルベルトは言論による世論の形成と、民主主義による統治と政策決定を重視したジャーナリストであった。ロペス（Alfonso Lopez Pumarejo）大統領を支持する過程で自由党の支持者として政治参加することになる。彼は自由党の論客として自由党に参加していたが、選挙での自由党敗北によって政界から退陣していった。

しかし、「ボゴタ暴動」以降、アルベルトは暴力の行使を停止し、惨事を食い止めなければならないとし、政界に再度参入した⁴。「ボゴタ暴動」以降、クーデターによってグスタボ・ロハス・ピニーリャ（Gustavo Rojas Pinilla）将軍が政権を獲得していた。アルベルトはロハス政権にて「ボゴタ暴動」で失われた民主主義的基盤の復興をしようとしていた。アルベルトは「ボゴタ暴動」からの復興のために「共存（Convivencia）」が必要であるとした。「共存」とは国民が共通で生まれ持つ公民としての財産であり、政府や政府に類推される二大政党による幅広い連立の政党政治によって形成されるものであるとした⁵。アルベルトは「共存」の概念によって、規律と国民主権を構築しようとしたのである。

2章では前半がアルベルト、後半にグズマンを中心として、「ラ・ビオレ

ンシア」でどのような暴力が行使されたのかが研究されている。本書ではこの当時のコロンビアでは国民が明確な暴力を「ラ・ビオレンシア」で経験してきたという共通認識を獲得していたとしている。この暴力の行使に対し、「学識派」は暴力を被った側の記憶を収集することで平和構築への足掛かりとした。「学識派」にとって暴力は政治的および経済的集団による要求実現が暴力の源泉であるとし、戦後復興のための共通認識を形成した。この共通認識の基礎となった政治的な強制力を伴う暴力は「ビオレンシア (violencia)」と定義した。

しかし、従来の日本国内の研究では「ビオレンシア」が「政治的・社会的暴力」と訳され、テロ、戦闘、暗殺、襲撃などの死傷者を伴う暴力行為として認識されているにとどまっている(二村 2002:33)⁶。「ラ・ビオレンシア」直後の政治的理由による暴力と死傷者を伴う暴力行為という「ビオレンシア」における定義の差異は後述する6章にて「ラ・ビオレンシア」が研究の過程であくまで研究対象としての事象へと学術的に変化したことが影響として大きいと考えられる。

3章ではアルベルトとグズマンによる平和構築の様子が述べられている。これ以前の平和構築の方針としてはアルベルトの「共存」であったが、国民の地域的・国家的な自認識を呼び起こすことによって、「ラ・ビオレンシア」からの復興の原動力とした。この復興活動が生み出した地方部での自由党、保守党、共産主義者による共存関係が「クレオール・ピース (the Creole peace)」と呼ばれる。一部の国民による経済的・政治権力的な独占に対する不満を抱えていた地方部の自由党員が共産主義と合流するようになった。この共産主義者たちがこの復興活動に参加し、地方開発を行ったことによって、地位を獲得していくことになった。これが、コロンビア・コミュニティと呼ばれる。

4章では「ビオレンシア」への反体制を非暴力ないし暴力を抑制する形で取り込んだ集団としてのコロンビア・コミュニティが、どのように暴力を容認する立場に変化していったのかが描かれている。「クレオール・ピー

ス」による各党員の関係改善が左派ゲリラであったマルランダ (Marualanda Velez, Manuel、のちの FARC 初代総司令官) の影響力を強めていった。しかし、マルランダの周りには地方部の各政党员が数多くいたために、彼らとの関係改善が優先されていた。1960 年代にキューバの共産化によってラテンアメリカに暴力革命と共産化の波が訪れた。「国民戦線」が寡頭支配体制によって不当に保持している権力を理由に FARC が設立された。マルランダは「国民戦線」と FARC との関係が物理的な強制力によって抑圧されるものに戻つつあったことに危機感を抱いていた。そのため暴力によって、「クレオール・ピース」よりも社会開発を進めようとした。

5 章では「学識派」たちの地方部と都市部、国内と国際における連結について解説している。暴力実践に対する平和の実践はあくまで、国内におけるものであった。加えて、平和の実践は地方部における局地的なもので、影響も限定的なものであった。都市部の「学識派」との接続や、国際的な議論に参加することで「学識派」影響力の拡大が始まった。これ以降、「学識派」が国内改革の中心を担うことになる。

6 章はグズマンとその共同研究者との共著である「La violencia de Colombia」の研究史である。しかし、この著書の中で暴力への観念や認識、実践が明文化され、分類されることで「ビオレンシア」が暴力の一技法として認識されるようになる。

しかし、この技術は近代化の中で、重要な学術的実験として分けられ、国家の暴力史としての「ラ・ビオレンシア」から国際的な暴力の行使の研究事例としての「ラ・ビオレンシア」に普遍化されていった。

本著の 7 章では、FARC の暴力を伴う反体制ゲリラへの傾斜に関して述べられている。FARC の方針決定が「学識派」の改革方針から乖離していくことでマルランダの方針決定の基本原則がコロンビア・ Kommunismus から消失していくことになる。これにより地方部の指導者、既に地方部から首都ボゴタのコロンビア国立大学に拠点を移していた「学識派」、自衛集団による三者の協力関係で行われていた地方部の社会開発と国内社会の構成改革が崩壊

に向かっていった。

FARC 内部の政策変更によって「国民戦線」との対決に向け、平和的な開発と協働から、暴力による改革へと変貌していったことで FARC が反政府ゲリラ的な性格を帯びていくことになった。

本著では、国内研究にてコロンビア内戦の始点とされてきた「ボゴタ暴動」を契機とした「ラ・ビオレンシア」について論じられている。議論の中心は「ラ・ビオレンシア」を定義し、暴力とは何かということを研究した「学識派」と呼ばれた知識人である。本著によれば、「学識派」は暴力を抑制するために暴力の行使を研究し、何を求めて暴力が振るわれたのかという事を定義した。暴力の行使に対抗する手段として、暴力に関する研究や「ラ・ビオレンシア」研究を用いたとしている。この暴力研究の平和的学術利用の賛同者の中には、のちに反政府左派ゲリラの中心的組織となる FARC などが存在していた。FARC の出発点は暴力の行使に対する反省があったと言えるのではないだろうか。本著ではこの FARC がどのように変化し、どのような理由から暴力の行使をするようになったのかという動きを確認することができる。これらからもわかるように、コロンビア内戦通史の中で政治的紛争も含めた暴力の源泉がどこにあるのか。また、FARC の出発点がどこにあるのかということが本著から読み解けるのである。

〈注〉

- 1 伊高 (2003) は「ビオレンシア」の発起源を 19 世紀第三期・第四期から 20 世紀初頭にかけての 1884 年のマグダレーナ河流域における自由党員蜂起、1899-1902 年にかけての「千日戦争」などとしている。しかし、二村 (2002) をはじめとする国内研究での多くが「ボゴタ暴動」としている。
- 2 伊高 浩昭『コロンビア内戦—ゲリラと麻薬と殺戮と』論創社 2003 年
- 3 伊高 浩昭『コロンビア内戦—ゲリラと麻薬と殺戮と』論創社 2003 年
- 4 アルベルトは暴力を 1930 年代以降のリベラリズムが取り込んだ政治的闘争であると理解し、当時の暴力の多くは 1930 年代のリベラリズムに責任があるとしていた。
- 5 本書から評者翻訳。原文は『Forgotten peace』29 ページ。
- 6 二村 久則, 2002 年, 「プラン・コロンビアとコロンビアの民主主義」, 『国際政治』第 131 号, 33-48 ページ

“**Forgotten peace:** Reform, violence, and the making of contemporary Colombia.”

参考文献

伊高 浩昭, 2003 年, 『コロンビア内戦 —ゲリラと麻薬と殺戮と』 論創社

二村 久則, 2002 年, 「プラン・コロンビアとコロンビアの民主主義」, 『国際政治』 第 131 号, 33-48 ページ